

第9回滋賀県多職種連携学会研究大会 報告書

学会テーマ：「多職種連携の深化～誰一人取り残さないために～」

開催日時：令和6年12月1日（日）10:30～16:30

会場：キラリエ草津 6階大会議室（草津市大路二丁目 1-35）

学会長：高橋 健太郎（一般社団法人滋賀県医師会 会長）

大会長：大野 辰治（一般社団法人滋賀県病院協会）

参加者数：124名

開催のあいさつ

学会長挨拶



基調講演

「誰一人取り残さない防災～多職種連携を踏まえて～」

講師：立木 茂雄（同志社大学 社会学部 教授）

座長：雨森 正記（滋賀県医師会）

（座長コメント）

災害時に「誰一人取り残さない防災」を実現するためには、福祉と防災を統合的に考える視点が欠かせません。災害リスクは自然要因だけでなく、社会の弱点や構造的課題にも起因します。特に障がい者や高齢者など弱い立場の人々は、避難や生活再建において多くの困難に直面します。彼らを支援するためには、生活の全体性や継続性、多様な再構築力（レジリエンス）の視点を取り入れることが必要です。また、平等ではなく合理的配慮を提供する「公平性」が重要です。こうした支援の実現には、行政、福祉専門職、地域住民の協働が不可欠です。普段から個別避難計画を策定するなど、災害時の準備と平時の福祉を結びつけた「全天候型」の支援体制を築くことが求められます。これにより、災害後の早期復興や生活再建を目指し、すべての人が安心して暮らせる社会を実現できます。



企画演題

「災害派遣チームの役割と多職種連携」

活動報告者：DWAT 前田 岳史 氏（ケアプランセンターカルナハウス）

JRAT 佐敷 俊成（滋賀県立総合病院）

JDA-DAT 澤谷 久枝（滋賀県栄養士会）

司会：川上 寿一（滋賀県立リハビリテーションセンター）

指定発言：堤 洋三（滋賀県老人福祉施設協議会）

：平岡 千夏（滋賀県看護協会）

（指定発言者コメント）

企画演題では能登半島地震において支援された多職種の中から3チームの活動報告を発表していただきました。私自身、東日本大震災後は支援活動をしていなかったもので、今回の報告をお聴きして、SNS 等の情報ツールをうまく活用され、引継ぎや横のつながりが図れていることに驚きました。そして何よりもそれぞれの専門職が平時から研鑽を積み、実践能力の向上を図られていること、いざという時に即、支援に向かえる準備をしていることを頼もしく思いました。



一般演題/活動実践報告発表

■セクション1「情報共有・機関の取り組み」座長:岩本 徹（滋賀県言語聴覚士会）

活動実践① 看取り見える化シートの活用と普及の取り組み

多川 晴美（滋賀医科大学附属病院 看護師）

活動実践② 多職種協働による GLIM 基準を使用した栄養評価の取り組み

林 正悟（琵琶湖中央リハビリテーション病院 管理栄養士）

一般演題① 当院の外来での高次脳機能障害患者のリハビリテーションについて

平川 圭子（滋賀県立総合病院 言語聴覚士）

一般演題② 滋賀県における失語症者向け意思疎通支援者養成事業及び派遣事業の報告～滋賀県言語聴覚士会～

岩本 徹（びわこリハビリテーション専門職大学 言語聴覚士）

（座長コメント）

今回私が担当したのは「情報共有・機関の取り組み」のセッションでした。自身の演題も含めて一般演題から2演題、活動実践から2演題であり、発表中の質疑応答も含めて積極的な意見交換の場になったかと思

います。また多職種による情報交換に加えて、今回発表された取り組みを是非今後持ち帰って実践していきたいという聴講者もおられ、大変有意義な機会になったかと考えます。

今回のように1つの機関内での素晴らしい取り組みを、学会を通じ職種や所属機関の垣根を越えて情報共有をすることで、医療・福祉等の分野の発展に繋がればと思った次第です。

■セクション2 「通いの場・事業所の取り組み」 座長:永田 敦也（滋賀県障害者自立支援協議会）

活動実践③ 入院および外来リハビリテーション利用者に対する地域包括支援センターと連携した通いの場等への参加推奨 田中 元輝（市立野洲病院 理学療法士）

活動実践④ 多職種協働による地域向け院内講座「いきいき健康教室」開催と地域サロンの横のつながりと融合 上嶋 美由紀（琵琶湖中央リハビリテーション病院 社会福祉士）

一般演題③ リハビリテーション職と関係団体の協働による和ボッチャ大会の実践 上野 浩司（滋賀県リハビリテーション地域スポーツ実行委員会 理学療法士）

一般演題④ 満足度アンケートから見た多職種連携の必要～利用者が本当に求めているサービスとは～ 岡本 昌大（訪問看護ステーションらっしゅナース 作業療法士）

（座長コメント）

活動実践では、地域包括支援センターと連携し通いの場等への参加を促した演題と院内の多職種協働や出前講座を実施する団体等による集客型院内講座についての演題であり、双方とも院内や地域のストレングスを活用し展開されている点において興味深い演題でした。

一般演題では、パラリンピックにおいて注目を集めたスポーツ競技「ボッチャ」を通じた包括的な地域イベントについての演題と利用者満足度調査より見えてきた地域に寄り添う多職種連携の在り方についての演題であり、双方ともアンケートや満足度等調査に基づいた考察が更なる多職種連携や地域共生社会の実現に向けた希望を感じさせる非常に興味深い演題でした。

■セクション3 「事例報告」 座長:雨森 正記（滋賀県医師会）

活動実践⑤ 利用者・家族が望むいきいきとした生活の実現を目指すための多職種連携の在り方 丸山 拓哉（琵琶湖大橋病院 作業療法士）

一般演題⑤ 認知機能低下した糖尿病患者の多職種連携効果～インスリン手技関連の再獲得を目指して～ 田中 智大（済生会滋賀県病院 理学療法士）

一般演題⑥ 視床出血後左片麻痺を呈した症例の排泄動作自立に向けた多職種協働 野村 真悟（滋賀県立リハビリテーションセンター 理学療法士）

一般演題⑦ 橋梗塞により食道通過障害が生じた症例が経口摂取を獲得するまでの軌跡～連携の観点から～ 竹村 淳（琵琶湖中央リハビリテーション病院 言語聴覚士）

（座長コメント）

本セクションでは、多職種連携による成功事例が報告され、患者や家族の生活の質向上に向けた具体的な取り組みが共有された。丸山拓哉氏は、多職種が連携して利用者の生活を支え、迅速な対応が成功をもたらした事例を発表。田中智大氏は、認知機能が低下した糖尿病患者に、視覚的でわかりやすい教材を用いて指導し、インスリン手技の再獲得を実現した取り組みを共有。野村真悟氏は、片麻痺患者の排泄動作自立を目指し、多職種協働で早期の練習を成功させた事例を示した。竹村淳氏は、重度嚥下障害患者が経口摂取を再

獲得するプロセスでは、職種間や地域医療機関の連携が鍵となった。これらは、多職種が柔軟に支援し、ICTや地域包括ケアの推進が重要課題であることを示した。

■セクション4「災害」座長:森 美穂（滋賀県理学療法士会）

活動報告⑥ 令和6年能登半島地震 1.5 次避難所での活動と ST の役割

佐敷 俊成（滋賀県立総合病院 言語聴覚士）

活動報告⑦ 自治会と社会福祉施設の協働による地域防災～「五箇荘川並町防災連携会議」による地域防災の基盤づくり～

奥村 昭（社会福祉法人 六心会 社会福祉士）

一般演題⑧ 甲賀版「だれ一人取り残さない」防災-保健-福祉連携プロジェクトの実践～実践の省察から見える人材育成～

竜王 真紀（甲賀市役所 保健師）

（座長コメント）

昨年 JRAT で能登の災害支援に行かせていただいたので、このセクションを担当させていただきました。どの地域でもどの職種でも災害対策への取り組みが熱を帯びた年となりました。災害に備えるためには普段の顔の見える関係作りが重要であり、防災訓練やお祭りなどの地域活動を日頃から一緒にするなかで助けあいの精神が育つのだと思いました。医療介護福祉施設は地域に入り込み地域住民の役に立つことをして恩を売っておくことで、災害時に住民さんに助けてもらえる winwin の関係性ができるのだと思いました。



学会長賞

甲賀版「だれ一人取り残さない」防災-保健-福祉連携プロジェクトの実践～実践の省察から見える人材育成～

竜王 真紀（甲賀市役所 保健師）



展示・体験ブース

日本防災士会滋賀県支部
滋賀県理学療法士会

閉会のあいさつ

大会長挨拶



<メディア>

NHK 総合 令和6年11月25日(月)18:54～放送
(第9回滋賀県多職種連携学会研究大会広報)

《協賛ご芳名一覧》(※敬称略・五十音順)

一般社団法人滋賀県医師会
一般社団法人滋賀県作業療法士会
一般社団法人滋賀県歯科医師会
一般社団法人滋賀県歯科衛生士会
公益社団法人滋賀県栄養士会
公益社団法人滋賀県看護協会
公益社団法人滋賀県社会福祉士会
公益社団法人滋賀県私立病院協会
公益社団法人滋賀県理学療法士会
滋賀県介護支援専門員連絡協議会
滋賀県言語聴覚士会
滋賀県立リハビリテーションセンター

《協賛広告ご芳名一覧》(※敬称略・五十音順)

一般社団法人滋賀県老人福祉施設協議会
医療法人幸生会琵琶湖中央リハビリテーション病院
社会福祉法人六心会
びわこリハビリテーション専門職大学